

坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書

1986.3

山東町教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

伊吹・靈山両山系の狭間に位置する山東町は、往古から近畿・東海・北陸往来の要として栄えてきました。わたしたちは、その姿を町内各所の遺跡にうかがうことができます。縄文の頃から近世にかけての遺跡は、すでに百余個所も確認されていますが、まだまだ数多くが地中に埋もれたままと考えられます。これら先人の文化遺産を、如何にして守り如何にして後世に伝えるかは現代を生きるわたしたちに荷せられた大切なつとめであるはずです。

最近、水田の基盤整備をはじめ土地の開発・整備が盛んに行われるようになり、尊い先人の暮らしの証しが、地中深く眠ったままで、次々と破壊される危険が増えました。そこで本町教育委員会では、昭和58年度から、国・県の補助をうけ、県教育委員会文化財保護課にお願いして町内遺跡の詳細分布調査をすゝめ、埋蔵文化財等の破壊・滅失防止に努めてまいりました。以来3ヵ年、ようやくにして、町内全域の調査を終わり、その成果をこの報告書にまとめることができました。

本報告書が、先人の文化遺産に対する認識と理解を深め、愛護・継承・研究の基礎資料として今後、大いに役立ってくれるよう願ってやみません。

終りになりましたが、調査を実施して下さった県教委文化財保護課・文化財保護協会の皆様や御協力下さった地元の皆々様の御苦労に対し深く感謝を申し上げます。

昭和61年3月

山東町教育委員会 教育長 西 秋 良 策

目 次

序

例言

1. はじめに	1
2. 調査の経過	1
3. 地理的環境	1
4. 町内分布遺跡の概観	2
(1) 繩文時代	3
(2) 弥生時代	3
(3) 古墳時代	4
(4) 奈良・平安時代	5
(5) 鎌倉時代以降	7
5. 主要遺跡の概要	9
6. 遺跡一覧	26
7. おわりに	29

挿 図 目 次

図1	町内各地出土弥生時代遺物	4
図2	大鹿遺跡出土瓦	6
図3	琴岡山遺跡出土土器	7
図4	各地城跡縄張図	8
図5	番ノ面遺跡出土土器及び竪穴式住居跡	10
図6	御墓遺跡及びトレンチ土壤内出土土器	11
図7	息長広姫陵古墳群出土埴輪及び石棺石材	13
図8	すも塚古墳出土遺物	14
図9	高岡塚古墳横穴式石室	15
図10	王塚（狐塚）古墳墳丘測量図及び横穴式石室、出土遺物	17
図11	弾正塚古墳群墳丘測量図	18
図12	弾正塚古墳群横穴式石室	19
図13	菅江遺跡出土土器	20
図14	北方田中遺跡遺構図	21
図15	清滝寺遺跡絵図	22
図16	宝持坊遺跡遺構図	23
図17	各地石造品	24

例　　言

1. 本書は、昭和58・59・60年度の3ヵ年で実施した山東町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は、国庫及び県費の補助を受けて実施した。各年度の調査経費は次の通りである。

昭和58年度	1,000,000円	(国庫50%　県費25%)
昭和59年度	1,000,000円	(　〃　〃　)
昭和60年度	1,000,000円	(　〃　〃　)
3. 調査は、滋賀県教育委員会の指導を受け、財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長南光雄）に委託して実施した。
4. 調査の体制は次の通りである。

昭和58年度

山東町教育委員会	教育長	西秋 良策
	社会教育課々長	竹田 康孝
	〃 係長	力石 寅次
滋賀県教育委員会	文化財保護課技師	田中 勝弘
財団法人 滋賀県文化財保護協会		
	調査課技師	奈良 俊哉
	嘱託調査員	中井 均

昭和59年度

山東町教育委員会	教育長	西秋 良策
	社会教育課々長	竹田 康孝
	〃 係長	力石 寅次
滋賀県教育委員会	文化財保護課技師	兼康 保明
	〃 〃	用田 政晴
財団法人 滋賀県文化財保護協会		
	調査課技師	奈良 俊哉

昭和60年度

山東町教育委員会	教育長	西秋 良策
----------	-----	-------

社会教育課々長 竹田 康孝
〃 係長 力石 寅次
〃 技師 桂田 峰男
滋賀県教育委員会 文化財保護課技師 用田 政晴
財団法人 滋賀県文化財保護協会
埋蔵文化財課
調査二係々長 田中 勝弘
調査一係技師 奈良 俊哉

- 5 本書は、田中勝弘、奈良俊哉が執筆し、奈良執筆分のみ文末に表示した。一覧表及び分布地図については両者共同して作成した。
6. 遺跡一覧表は、昭和56年度滋賀県教育委員会発行の『滋賀県遺跡目録』を基本としているが、新たに発見、追加した遺跡を所在する大字単位にまとめたため、遺跡番号を変更している。また、位置の誤り、遺跡名の変更等を行っており、『滋賀県遺跡目録』に従わない部分がある。
7. 本書は、昭和58～60年度の3ヵ年の間で、地表観察により確認した遺跡を掲載したものである。従って、今後の発掘調査や工事等による情報により、遺跡の範囲の変更、新たな遺跡の追加等を行なう必要がある。

1. はじめに

山東町における埋蔵文化財の包蔵地に関しては、『近江国坂田郡志』（昭和16年、なお、昭和50年に『改訂近江国坂田郡志』が発刊されている）や、これに多くを依拠している滋賀県教育委員会発行の『滋賀県遺跡目録』（昭和40年）がすべてであり、昭和56年度発行の『滋賀県遺跡目録』も昭和40年度版を転載したものにすぎない。これらに記載されたものの多くは、偶然の機会に発見された石器等の遺物の出土地点や、塚、寺院、城跡等の伝承地点等で占められており、集落跡や伝承地点等における遺構遺存の可能性や範囲等が不明瞭であり、極めて不備なものであったと言わざるを得ない。特に、昨今、ほ場整備工事を中心に道路改良や河川改修等の開発事業が当町内にも及びはじめており、開発と遺跡保存との調和を計る上にも、また、文化財の普及啓蒙を計る上にも、現地観察を踏まえた遺跡分布資料を早急に作成する必要性が痛感されたのである。こうした状況をもとに、昭和58年度より3ヵ年計画で、国庫及び県費の補助を受けて、町内の遺跡詳細分布調査を実施することとしたのである。

2. 調査の経過

調査は、昭和58年度から60年度の3ヵ年計画とし、最終年度には、現地調査と並行して調査報告書を刊行することとした。調査は、町内を南部、東部、西部の3地域に分割し、一地域一年の調査期間を設定した。確認した遺跡は、山東町発行の2,500分の1及び10,000分の1の地形図にその位置、範囲を記入し、現況を遺跡カードに記録した。また、遺跡の現況を写真撮影した。さらに、古墳等遺構の明瞭なものはできるだけ測量し、測図をもとに範囲を決定したものもある。

現地調査を実施する一方、町内遺跡に関する文献資料をも探査した。

なお、遺物所有者や地元の方々に対する聞き取り調査は、今回は十分に実施しきれなかった。今後、本書にもれたものも含めて、町民の方々の文化財に関する情報の提供を期待する次第である。

3. 地理的環境

山東町は、近江の最高峰伊吹山の山裾にあり、南に鈴鹿山脈、西に横山丘陵があつて、

四方を山に囲まれた盆地（関ヶ原地狹部）となっている。北端に姉川が西流し、南に天ノ川が狭い谷部を通って西流している。両河川は湖北の肥沃な沖積平野を形成しているが、当町内にあっては両河川による沖積作用は極めて小さく、その恩恵は少ない。町面積の大半を山丘部が占め、残された狭い平野部も、特に南部を中心に多数の低小丘が点在していて、可耕地面積を一層狭くしている。

一方地理的に見ると、山東町は古代美濃国との国境に接し、古代三關の一つである不破關が視近距離にある。すなわち、中山道を通り、不破關をぬけた最初の宿場町が柏原である。この柏原は、古代幹道の一つ北国脇往還道（現国道365号線にほぼ沿う）との分岐点でもある。柏原から中山道沿いに醒ヶ井をぬけ、朝妻から湖上ルートを利用して畿内へ入る経路が考えられるが、一方、日本海地方、特に越前に至る幹道は、この北国脇往還道が極めて重要な役割を果している。中山道の鳥居本附近を分岐点とし、琵琶湖々岸沿いを北上する北国街道も日本海地方へ至る主要道であるが、古墳等遺跡の分布や土器形式等に見られる文化伝播経路等からすれば、伊勢湾地域から美濃を経て、北国脇往還道沿いに北上し、余呉から北国街道に入って武生へ入るルートが最も重要であったことが知れる。同じ日本海地方でも若狭へ至るルートが湖西を利用しているのと対象的である。すなわち、山東町は主要街道の門戸的な位置を占めているのである。こうした地理的条件は、山東町が東西文化の接点であり、近江への文化導入の門戸となり、また、政治上、あるいは戦略上、常に重要な位置を占めさせてきたのである。地形的条件に恵まれず、生産基盤の貧弱さとは別に、縄文時代以降現在に至るまで、山東町は常に歴史の表舞台に立って来たのである。

4. 町内分布遺跡の概観

昭和58年度から60年度にかけて実施してきた分布調査により、確認した遺跡は147ヵ所にのぼる。昭和40年度滋賀県教育委員会刊行『滋賀県遺跡目録』掲載の93ヵ所に対し54ヵ所の増加である。すでに消滅しているものも若干含まれるが、大半が何等かの痕跡を残していると思われるものである。遺跡の種別に見ると、古墳（古墳群は1ヵ所に数える）28%、寺院跡26%、集落跡18%、城館16%、中世墓地5%、窯跡3%、経塚1%、その他3%である。当然複数の性格を持つものや発掘調査の結果性格を変更するものもあるが、現在知れる範囲での数値である。これをまた時代別に集計すると、縄文時代1%、弥生時代4%、古墳時代28%、奈良・平安時代20%、中世以降20%、不明27%となる。これも今後

変化するが、一応当町における歴史の流れを示している。このように集計してみると、古墳の数に対して集落跡が少ないと、また、奈良・平安時代の集落跡が、古代幹道が通過している割には少ないと、総じて集落跡の少なさが気になる。今後、その個所数が増加する可能性の一番強いものであろう。官衙や豪族の邸宅等が見られないのは、これらが発掘調査の結果より推察される性格のものであり、未調査の段階ではカウントできない。弥生時代遺跡の少なさは当町の地形的な条件による可能性がある。中世以降の城砦跡が比較的多いのは、当町の地理的条件から当然といえよう。

以上、町内分布遺跡の概要であるが、次に、各時代毎に概観しておくこととしよう。

(1) 縄文時代

縄文時代遺跡は極めて少ないが、当町内には全国的に極めて著名な番ノ面遺跡が所在する。縄文時代は約10,000年の間を土器形式の変化を物指に、早・前・中・後・晚期の5時期に区分しているが、番ノ面遺跡は中期末頃に位置付けられ、近畿地方の縄文土器編年の標式遺跡になっている。また、近畿地方において、縄文時代の住居跡が初めて検出された学史に残る遺跡もある。

湖北地方では、早・前期のものが、余呉町余呉湖、湖北町尾上、近江町法勝寺、米原町磯等で知られ、後・晚期の遺跡とともに低湿地に立地するのに対し、中期のものは、余呉町柳ヶ瀬、木ノ本町古橋、川道、浅井町醍醐、伊吹町伊吹等が知られているように、伊吹山系に属する山丘台地の標高の高い部分に立地するという特徴が見られる。番ノ面遺跡は鈴鹿山系に属するが、やはり山丘台地に立地している。縄文時代中期の遺跡では、湖北地方では醍醐遺跡の調査が実施されているが、この遺跡は中期前半頃のもので、瀬戸内地方と極めて関連の強い性格のものとされている。一方、中期末に下る番ノ面遺跡では、東日本的な色彩が濃くなるという変化が指摘されている。いずれにしても、醍醐遺跡を含め、東日本、西日本両文化の接点というべき地理的性格が、すでに縄文時代に見受けられるのである。

(2) 弥生時代(図1)

北九州で縄文晩期の水田跡が発見されて久しいが、稲作文化の東漸は極めて早く、弥生時代前期には伊勢湾地方にまで達している。近江への伝播は、山城から湖南へ入り北上する経路、大和から伊賀を経て野洲川を下る経路の他に、大和から伊賀、伊勢、尾張、美濃

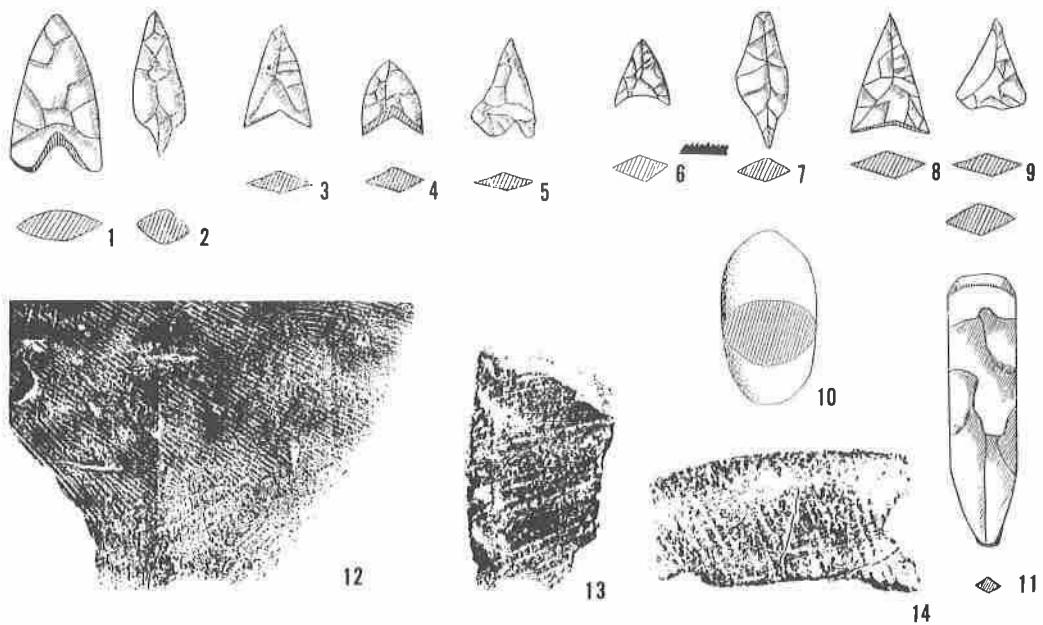


図1 町内各地出土弥生時代遺物

を経て湖北を北上する経路がある。湖北地方への伝播は極めて早く、前期中段階（前期を古・中・新の三時期に区別する）には高月町の磯野遺跡にまで及んでいる。長浜平野では、最近古段階の土器類が出土していると言われる。湖北地方への伝播経路については、長浜市川崎遺跡から、伊勢湾地方に見られる縄文土器の系譜をひいた土器類が前期中段階の弥生土器と併出していることから確められる。伊勢湾方面から流入する弥生文化は、西方へは米原町入江内湖が限界のようであるが、北方へは、先述のように、極めて早い段階に湖北平野の北端近くまで達している。その門戸的位置を占める山東町内の弥生文化については、極めて不明瞭な点が多い。現在のところ、柏原、須川、大野木等で石器や土器類の出土が報じられているにすぎない。遅くとも中期には遺跡の成立を見ていると考えられるが、長浜平野程濃密な分布状況を示していない。このことは、当町の自然条件によるものであろうが、湖北地方に開化する弥生文化の門戸的位置にある当町の弥生時代遺跡は、今後の調査何如によっては、湖北地方の弥生文化成立の謎を解き明してくれるものと考えられる。

(3) 古墳時代

古墳時代の集落跡は、その数が少ないのでなく、実態の知れるものもない。しかし、

当町の北部、特に、長浜市を界する横山丘陵を中心に多くの古墳が分布しており、今後、集落跡の数は増加するだろう。古墳については、前方後円墳かとされる上塚・唐古塚・瓢箪塚・王子古墳等があるが、いずれも墳形は明確でなく、古墳とするには疑わしいものもある。古墳時代前期にさかのぼるものは知られておらず、中期古墳の可能性のあるものとしては、すでに消滅てしまっているが、木棺の直葬と考えられる鳥脇の猿田彦女命古墳がある。また、息長広姫陵古墳群中に中期末の埴輪を出土するものがある。いずれにしても、出土遺物や主体部構造の知れるものはすべて後期古墳であり、前・中期古墳については今後の調査待ちの状況である。

湖北地方の古墳の分布状況については、横山丘陵北端からその西側平野部にかけて、茶臼山・丸岡山古墳等 100 m を前後する前方後円墳を含む長浜古墳群が中期に成立する。同じ頃、湖北北部伊香郡では、古保利・物部・涌出山古墳群等やはり前方後円墳を含む古墳群が形成されており、ともに、在地有力豪族の拠点的地域を形成していると言える。東浅井郡においても、浅井町八島附近を中心に中期古墳の分布が認められる。ふりかえって、山東町内では、現在のところ、古墳の分布から見る限り、前方後円墳を中心とした拠点的地域形成はなされていないようである。

後期には、各地に多数の横穴式石室を持つ群集墳が成立する。近江町で、湖北地方においては唯一前方後円墳を含む息長古墳群が形成されるが、中期に見られた在地豪族の形成した古墳群は後期には終焉を向かえ、追葬の可能な横穴式石室を持つ小墳が、集落を構成する有力家族単位で形成されるようになる。横穴式石室の採用は 6 世紀初当であるが、多くは 6 世紀後半から 7 世紀前半頃のもので、高岡塚・すも塚・王塚・弾正塚古墳等町内の内容の知れるものも、いずれも 6 世紀後半の築造になる。町内の群集墳の特徴は、群を構成する基數が比較的少ないことである。このことは古墳に対応する集落規模と関係すると考えていいだろう。

古墳時代は、一応大化の改新（645）でピリオッドを打つ。以降の古墳形態を持つものは終末期古墳と呼ばれるが、町内では今のところ確認されていない。

(4) 奈良・平安時代（図2・3）

この頃の遺跡としては、集落跡、窯跡、寺院跡等が知られるが、官衙に関するものは不明である。寺院跡については、長久寺・大鹿遺跡で瓦が出土しており、伝承地の多い中の貴重な手掛りである。

窯跡は、高月町や浅井町等で7世紀代のものが知られているが、当町内のものは8世紀に下る。鳥脇・朝日・野一色・菅江等横山丘陵部に立地する須恵器窯で瓦窯跡は知られていない。

集落跡と考えられるものの大半はこの頃のもので、北方田中・大鹿・上向川遺跡等では発掘調査が実施された。特に北方田中遺跡では多数の掘立柱建物、門跡、井戸、木簡等が出土し、郷長クラスの屋敷跡かと推定されている。

集落跡と関連して、古代開発の目安となる条里遺制については、湖北平野に極めて良好に、広範囲に分布している。その施行時期についても、一部地域に限って7世紀代にさかのぼることが判明しており、大規模には、平安時代に入ってから、畿内の權門勢家による荘園経営に関連して実施されたと思われる。しかるに当町内においては、条里遺制は顕著でない。ただ、弘仁十年二月の大原郷長解文に「大原一條三里廿二今治田伍段云々」、唐招提寺文書に「坂田郡自山以東大原二條七里廿五」等が見られ、ある程度の条里開発が実施されたであろうことは推察できる。多数確認されつつある集落跡は、こうした条里開発についても重要な資料を提供してくれるだろう。

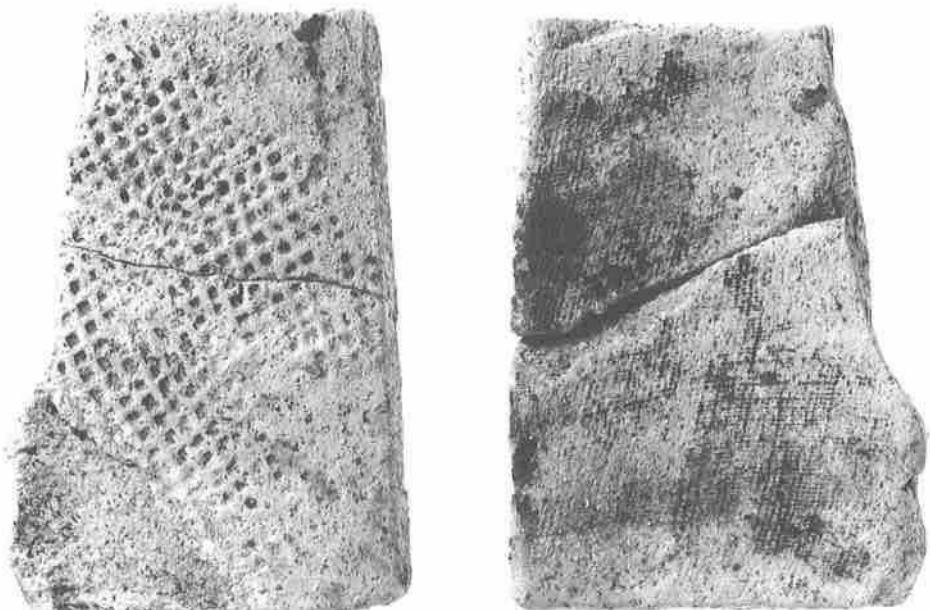


図2 大鹿遺跡出土瓦

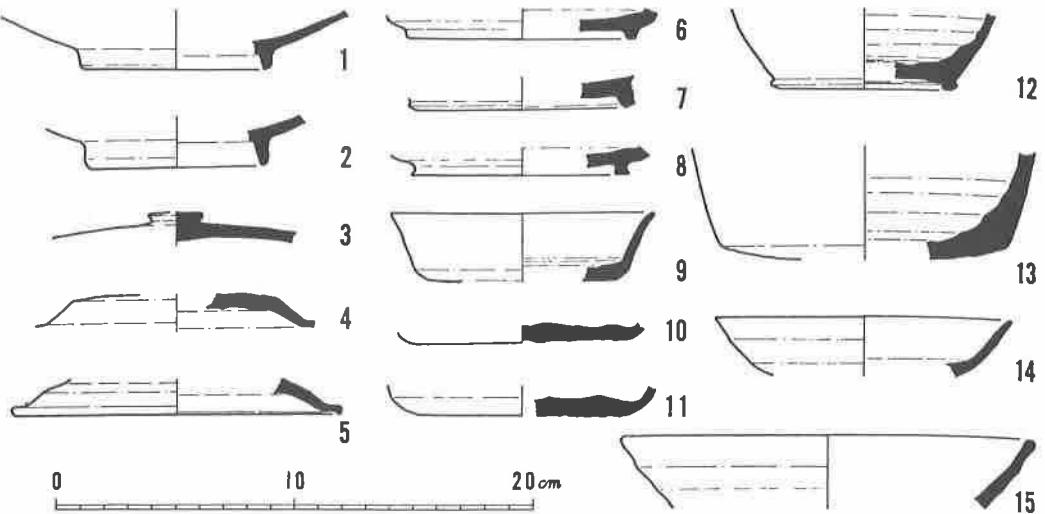


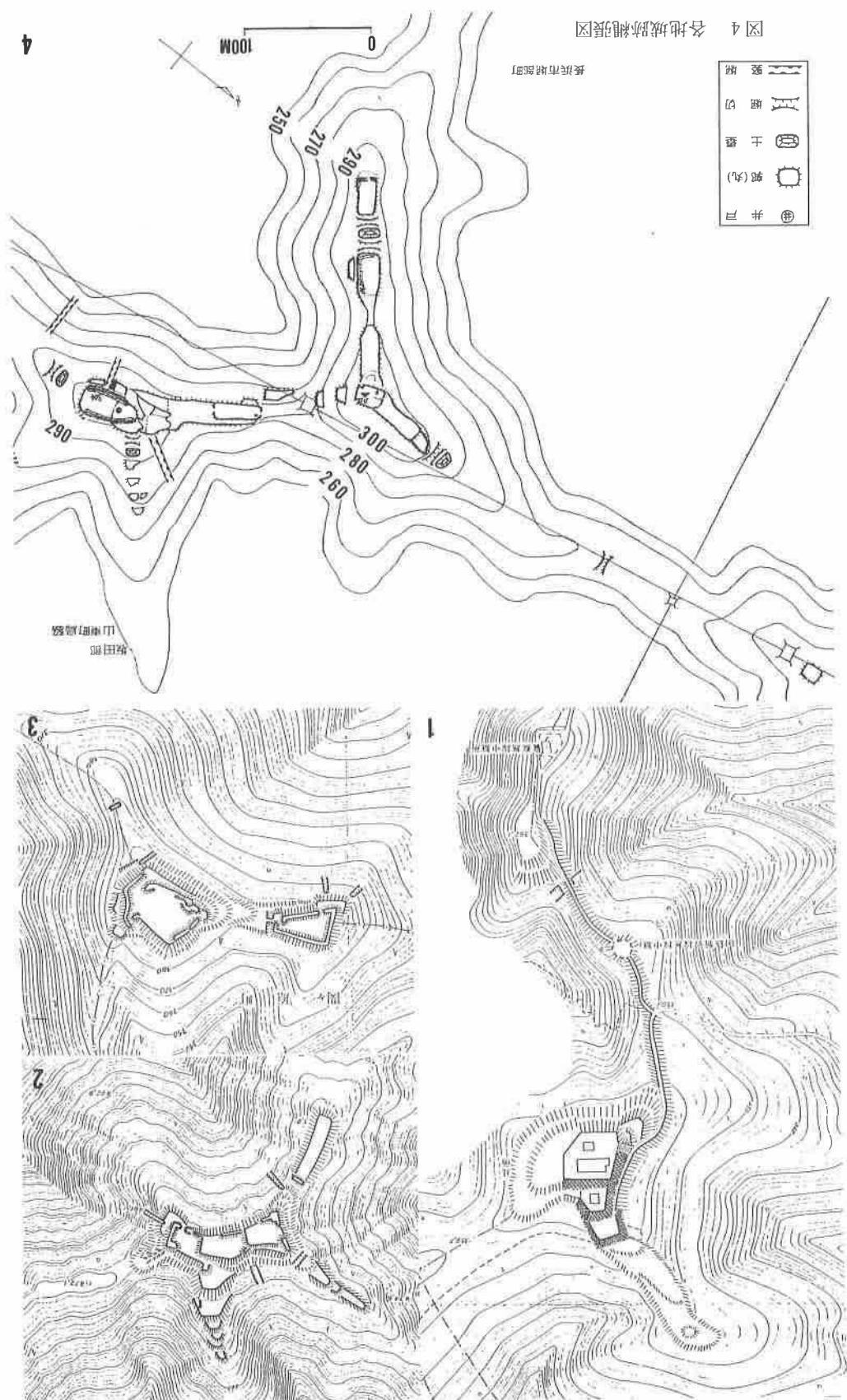
図3 琴岡山遺跡出土土器

(5) 鎌倉時代以降 (図4)

前項の集落跡としてあげている遺跡の中には、鎌倉時代以降に継続して営まれたものも含まれているものと思われる。ただ、多くの調査例を見ると、古墳時代あるいは下って奈良時代頃に成立した集落跡が継続して鎌倉時代以降まで営まれる例は少ないようである。これは、律令体制の崩壊と権門勢家による土地の莊園化、新たな開墾、彼等による条里の施行、また、平安時代後期における大規模な条里開発、武士団の成立等、自然村落が計画村落に組み込まれる社会的要因が発生したためだろうと思われる。また、鎌倉時代以降の集落は現集落と重複する可能性が極めて高く、平安時代まで続いた集落跡も鎌倉時代以降には現集落に包括されて存続している可能性も考えられる。特に、山東町のように、条里開発の後進地域では、中・近世に新たに開発された地域も比較的広範囲に及んでいるものと思われ、これに伴う集落跡も中・近世に新たに成立を見るものも存在しよう。今回の調査では中・近世の集落跡については確認し得ていないが、上述のように現集落と重複している可能性もあり、今後の注意が必要である。

鎌倉時代以降のものとして確認し得るもののは、城跡、砦跡、館跡、墓、寺院跡等である。このうち、墓については、極めて多数の五輪塔、宝篋印塔等を見ることができる。大半が元の位置を保たず、集積されたものであるが、地形的に墓跡とし得るものがある。北谷遺跡の谷奥の丘陵斜面には原位置を保ったもの、墓地跡と考えられる段差等が残り、

图 4 各地城跡地圖



遺存状況の極めて良好な一例である。

館跡の大半は現集落内にある。寺院跡も同様であるが、字名より門の位置が推定でき、谷状部の地形を極めて有効に利用した清滝寺遺跡や菅生寺遺跡等では、寺院内の地割をも推定できる状況にある。その他の寺院跡においても、宝持坊遺跡をはじめ、文献・伝承と良く一致し、遺存状況も極めて良好である。

城・砦跡については、明確な遺構を確認し得ないものも含まれるが、当町の地理条件により多数のものが分布する。このうちの一・二を取り上げて見ると、長久寺の長比城は近江と美濃の国境で、中山道を抑える要衝の地にある。虎口の構造や土塁による囲いは戦国時代後半の築城を濃厚に示している。この城は元亀元年、朝倉景鏡が浅井氏の援兵として築城し、織田信長の近江侵入に対したもので、『信長公記』元亀元年六月十九条に「たけくらべに要害を構へ候」とあり、現状遺構と文献の年代がほぼ一致しているのである。梓河内の八講師城は京極氏の詰城といわれるものであるが、石垣による虎口が残存し、戦国時代末期の築城を物語っている。このように、山東町は近江と美濃の国境地帯として、数多くの城砦が分布したのである。

5. 主要遺跡の概要

本項では、かつて発掘調査が実施されたもの、また、未調査でも出土遺物等があり、それらの測図が作成されているもの等、遺跡の年代や性格等が比較的良く知られているものを紹介する。

(1) 番ノ面遺跡(図5)

大字梓河内と柏原にかかる。現在国道21号線と名神高速道路により分断されているが、山丘端の台地に立地している。昭和38年に発掘調査が実施されており、縄文時代中期末の遺物及び同時期の竪穴式住居跡が検出された。竪穴式住居の検出は、近畿地方において最初であり、土器類は、近畿地方の土器編年の標式として、今日なお用いられている。

竪穴式住居跡は隅丸の方形プランを持ち、東北辺3.75m、西北辺4.3m、東南辺4m、西南辺3.8mを計る。4本の柱穴があり、中央に70×50cm程の楕円形のピットがあり炉跡と考えられている。炉内には凝固した薄い灰層と加熱され変色した焼土が残っていた。遺物は土器類を中心に石鏃等の石器類がある。土器類には、隆線文形の様式から脱却し、外面を

太い沈線で区画し、その間を太く短い沈線を充填する等の特徴を持ったものがあり、関東地方で展開した加曽利E式と深く関係を持ったものがある。これに先行する浅井町醍醐遺跡では瀬戸内地方の色彩の濃い土器群が出土しているのに対し、地方色のある番ノ面式ともいえる特徴を持ちながら、中部・関東地方の色彩を帯びる等の変化を認めることができる。石器類の中に、中部山岳地産出の黒耀石製の石鏃等が含まれており、文化圏の変化が示されているとともに、広い交流圏の存在をも知ることのできる遺跡である。 (奈良)

(小江慶雄「滋賀県番の面縄文式住居遺跡」(『京都学芸大学学報A—No. 9』、1956)

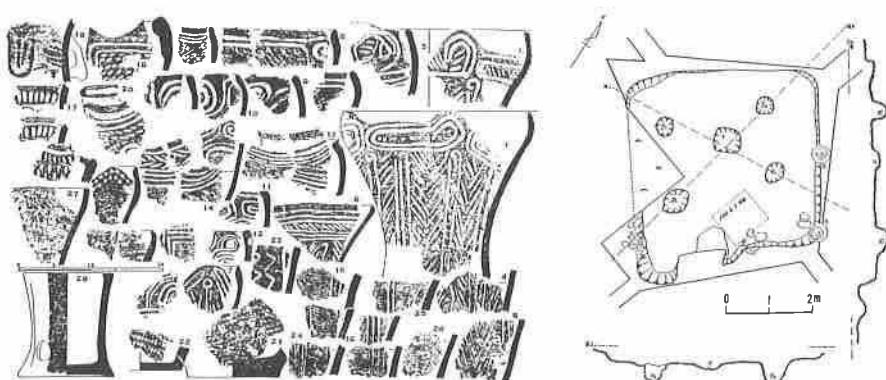


図5 番ノ面遺跡出土土器及び竪穴式住居跡

(2) 御墓遺跡 (図6)

大字大野木に所在する。かつて、明治39年に打製石鏃7点が発見されている。無茎のもの5点、有茎のもの2点である。大野木地先においては、小字五反田で無茎のもの、小字三百穂の宮川と親谷川が合流する付近で、長さ約3cm9mmの大型のものが発見されている。当遺跡は、昭和55年度に、団体営ほ場整備事業に伴い発掘調査が実施された。その結果、かつて発見された石器類に関する遺構は発見されなかったが、現集落の西200m附近で弥生式土器の細片を出土する個所がある。また、大野木の南、須川地先において、ほ場整備工事中に弥生式土器とともに石斧が発見されている。大野木と須川は、地形的には一つの谷部をはさんだ別個の丘端台地に立地するが、ともに、天ノ川右岸に形成された遺跡である。

石器類に関する遺跡の実態は今後の調査を待たねばならないが、昭和55年度の調査で、径4.2m、深さ20~25cmの円形の土壙が検出された。土壙内からは、土師器碗、小型甕、壺、

須恵器碗、蓋が出土した。9世紀後半のものであるが、木ノ本町長野1号墓とセット関係が似ており、墓跡と考えられるものである。同遺跡から、かつて、須恵器片とともに多数の木炭が出土したと伝えられており、本来、平安時代頃の墓地が多数分布していた可能性がある。

(田中勝弘「坂田郡山東町御墓遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-2, 1980)、『改訂坂田郡志』第1巻 (1975))

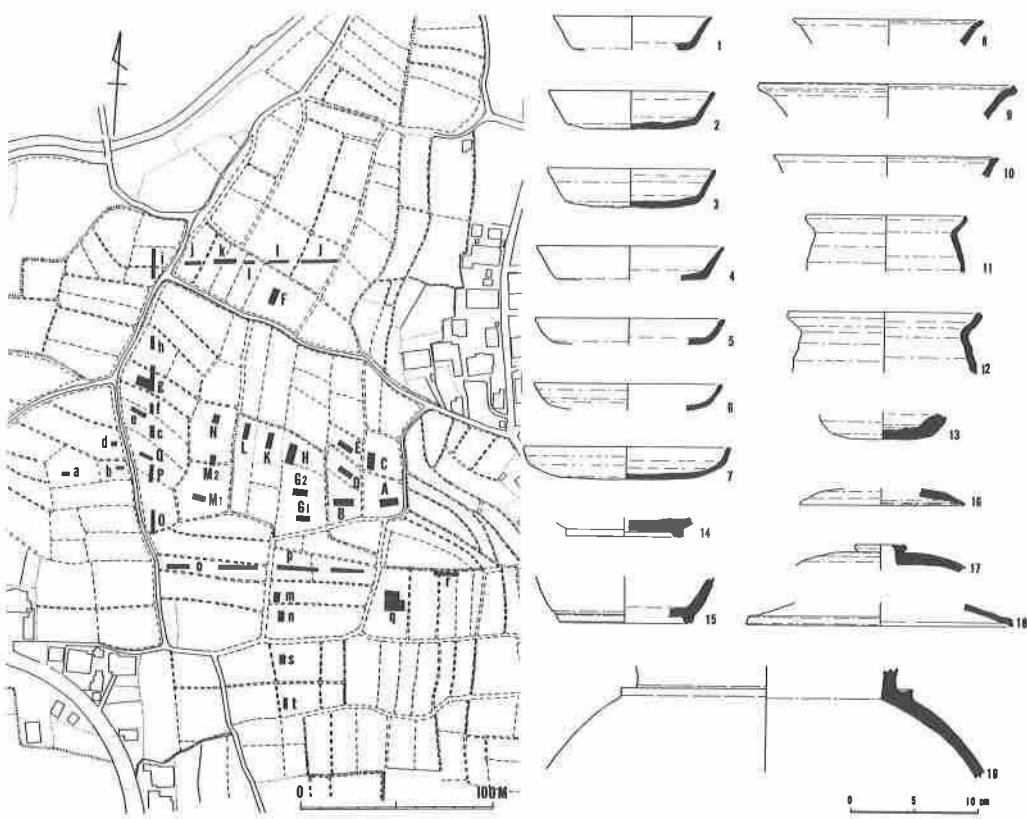


図6 御墓遺跡及びトレンチ土壙内出土土器

(3) 猿田彦女命古墳

大字鳥脇に所在する。鳥脇集落の南側の細長くのびた舌状丘陵の丘腹に立地する。この丘陵の東側平地にすも塚古墳があり、丘陵の尾根上に鳥脇古墳（通称上塚）が位置する。土取り工事により消滅しているが、当時の見聞では何等石材や遺物は出土しなかったとい

う。木棺直葬であったと思われる。全壊に近い状態で測量調査が実施されているが、これによると、直径20数m、高さ3m前後の円墳であったと思われる。ハニワや葺石等の外部施設はない。墳丘は版築状に土砂を盛り上げており、横穴式石室墳とは異なる盛土法を採用している。おそらく、横穴式石室採用前、古墳時代中期のものと思われる。町内において中期の古墳は明確でなく、未調査のまま消滅したことは、町内の古墳時代史を暗黒にするに等しい。

(4) 息長広姫陵古墳群(図7)

大字村居田にある。30代敏達天皇(538~585年)の皇后息長広姫陵墓指定地とその附属地を含む。ただし、現在の陵墓は、明治28年9月に石柵を設けて整えられたものである。陵墓指定の発端は、元禄9年、同字に所在する光運寺本堂改築のため、その地を開墾した際に石櫛と石棺が発見された事である。明治5年10月の検察の時の古図を模写したものが『改訂坂田郡志』に掲載されているが、これによると、石棺は家形石棺の蓋らしく、長さ約2.19m、幅1.07m、高さ0.48mで、天井部の平坦面はないよう、一条の稜線で示され、4基の繩掛突起が天井斜面部に、やや斜上方向に向いているかのように図示されている。古式の形式を呈した家形石棺であるように見受けられる。石櫛とされるものの構造は不明であるが、 $1.63 \times 0.96 \times 0.37\text{m}$ 及び $4.85 \times 1.52 \times 0.21\text{m}$ の2枚の板状の石材が図示されている。この発見と延喜諸陵式に記載されている

息長墓(舒明天皇之祖母、名臼広姫、在近江国坂田郡、兆域 東西一町、南北一町、守戸三烟)の記事とにより、息長広姫の陵墓に比定されるに至ったのである。明治の検察記事以外に詳細は不明であるが、最近、陵墓に隣接する光運寺本堂裏の基壇石垣改築の折、多数の埴輪が出土した。現本堂基壇が古墳墳丘の一部であることを示す発見であるとともに、その埴輪が成形技法等から5世紀末頃のものと考えられ、かつて出土した家形石棺の形式から考えられる年代ともほぼ一致しており、元禄年間発見の古墳と同じものであることが判明した。従って、光運寺本堂附近にかつて古墳が存在したことは確実で、それは5世紀末頃のものと考えられ、広姫陵とするには年代的に相違する。近接する位置に長浜市茶臼山古墳(全長92mの前方後円墳)があるが、光運寺出土埴輪と同形式のものが出土していると言われる。また、西側横山丘陵からさらに西側平地にかけて長浜古墳群があるが、いずれも6世紀に下る前方後円墳は知られていない。6世紀に下る前方後円墳は、近江町域にはいる息長古墳群(山津照神社古墳等)のみであり、広姫陵はむしろこちらで求めるべきで

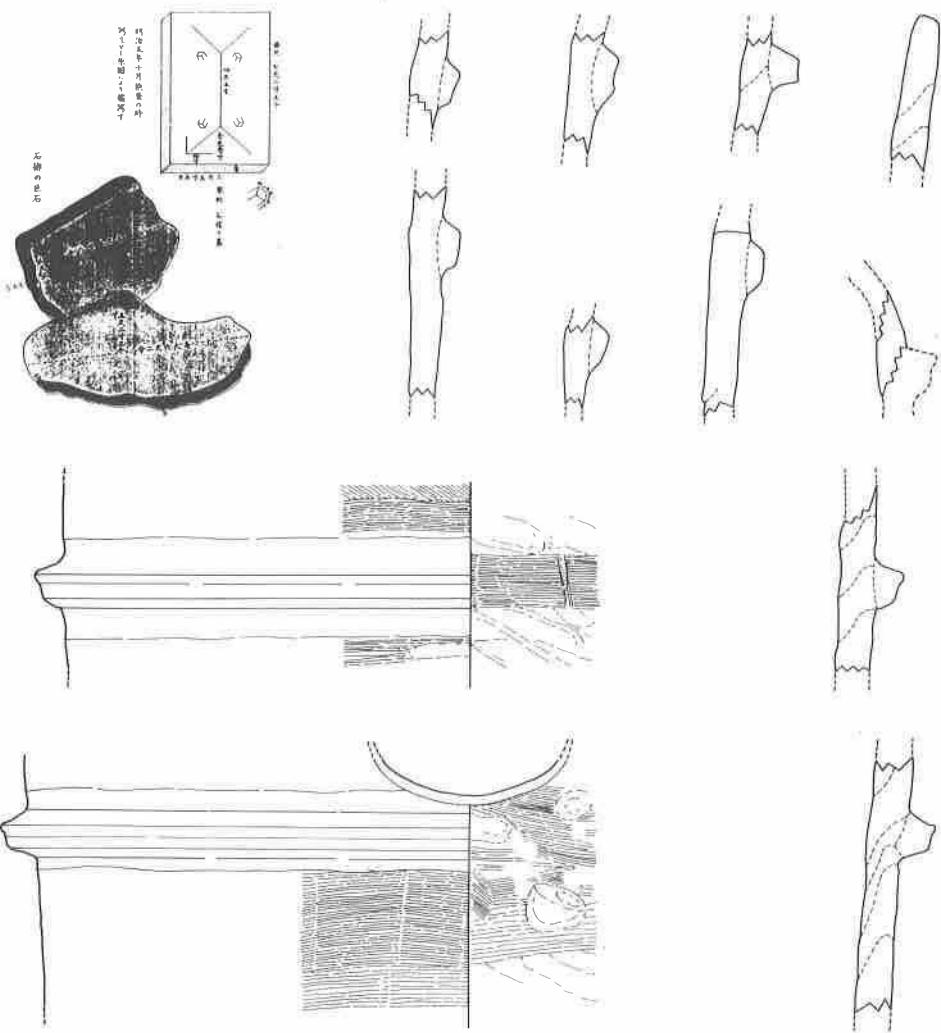


図7 息長広姫陵古墳群出土埴輪及び石棺石材
(埴輪の縮尺 $\frac{1}{3}$)

はなかろうか。

光運寺本堂南側に陵墓参考地として一基の古墳がある。光運寺本堂のものを主墳とした培塿と思われる。現集落をも含めて、幾つかの古墳で群を構成していた可能性がある。

(『改訂坂田郡志』(1975))

(5) すも塚古墳(図8)

大字野一色に所在する。明治45年の同字西元寺本堂改築のための土取り工事中に発見さ

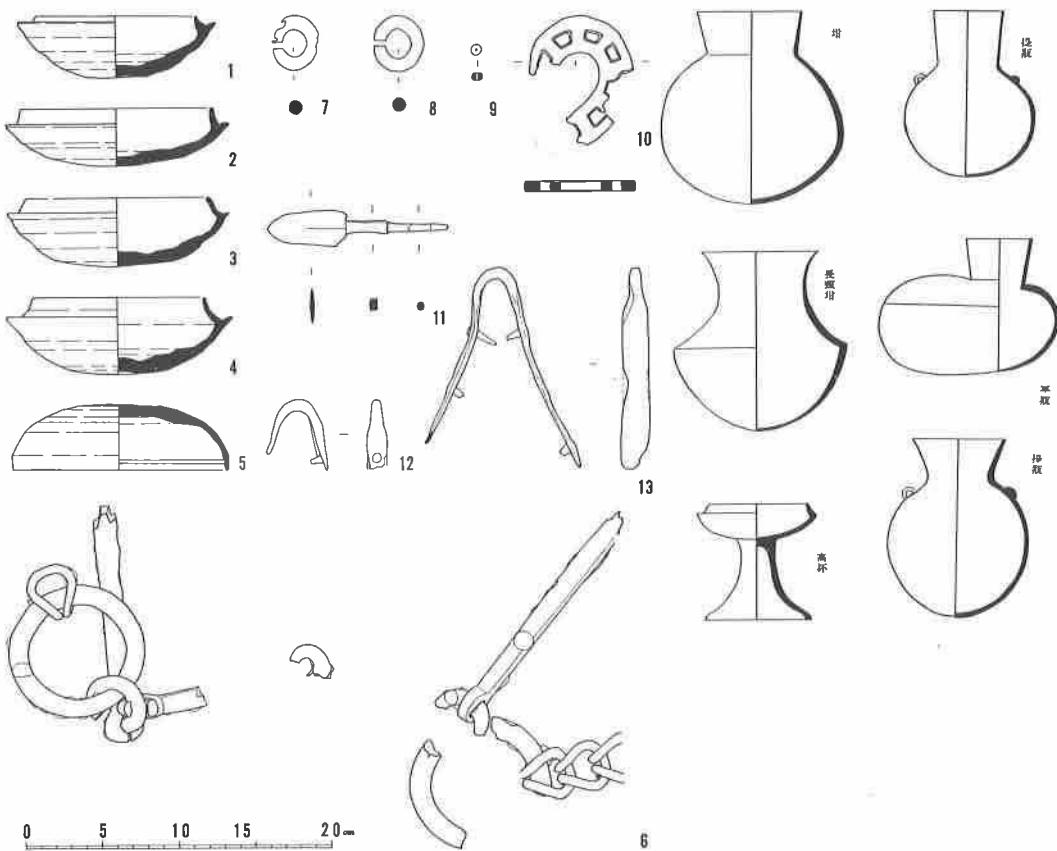


図8 すも塚古墳出土遺物

れたもので、すでに消滅している。もと小丘があり、土取りの際石が出たということから横穴式石室を内蔵していたようである。石室の規模等は不明である。

出土品には須恵器、武器、馬具、装身具があり、須恵器は、提瓶2、蓋杯11、高杯2、横瓶1。武器は直刀1、鐸1、鉄鎌1。馬具は鐙、轡。装身具は金環、銀環、ガラス小玉等々が記録されている。

須恵器類の形式は複数あり、6世紀後半から7世紀初頭にかけて使用された横穴式石室墳である。

(田中勝弘「山東町すも塚古墳の出土遺物」(『滋賀文化財だより』No.10、1978)、『改訂坂田郡志』第1巻(1975))

(6) 高岡塚古墳 (図9)

大字間田地先にあり、低丘陵の最南端に立地している。同丘陵には、間田廐社古墳、日御子社古墳等の円墳、葺石を持ち、前方後円墳かとされる唐子塚古墳等も分布する。

高岡塚古墳は昭和59年度に発掘調査が実施されている。すでに墳丘は消失していたが、径18mの横穴式石室を持つ円墳であることが判明した。横穴式石室は、中軸線がN15°Eにあり、南々西に開口している。玄室と羨道の区別がほとんどなく、無袖式としてよからう。石室全長は8.4mで、玄室に当ると考えられる部分は長さ約6mである。羨道が極めて短いが、さらに外側に、幅80cm、長さ3m程の掘り込みがあり、いわゆる地山羨道と考えられるものが続き、従って羨道は5.4mの長さとなる。石室石材は地元で産出する石灰岩を用いている。玄室奥壁に鏡石1枚を用い、側壁には比較的小型のものを使用している。玄室と羨道との境の石材も区別がない。

出土遺物としては須恵器等の小片のみで、古墳の時期を決めかねるが、湖北地方のこれまでの調査例からすれば、6世紀末から7世紀初頭をさほど前後しない時期のものと思われる。

(奈良)

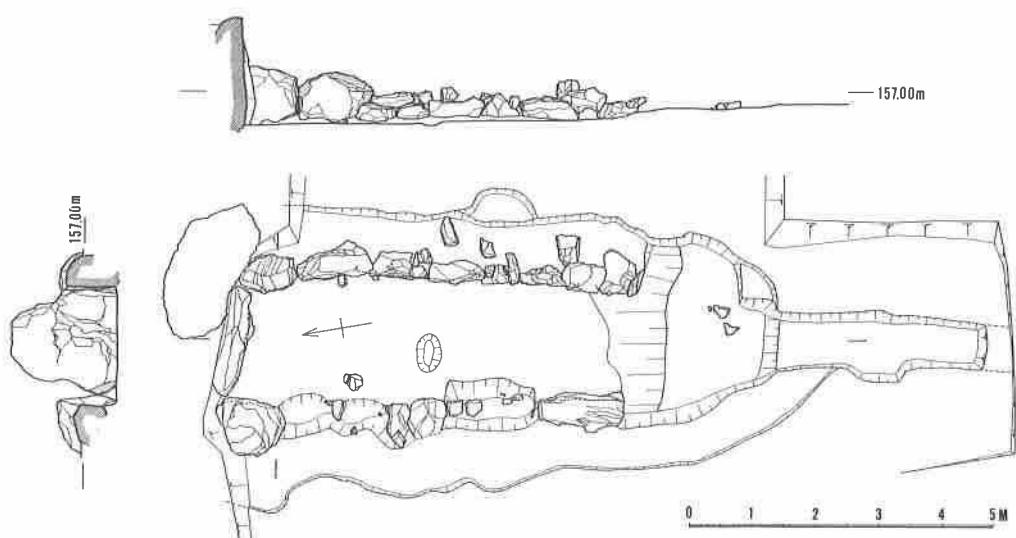


図9 高岡塚古墳横穴式石室

(7) 王塚（狐塚）古墳（図10）

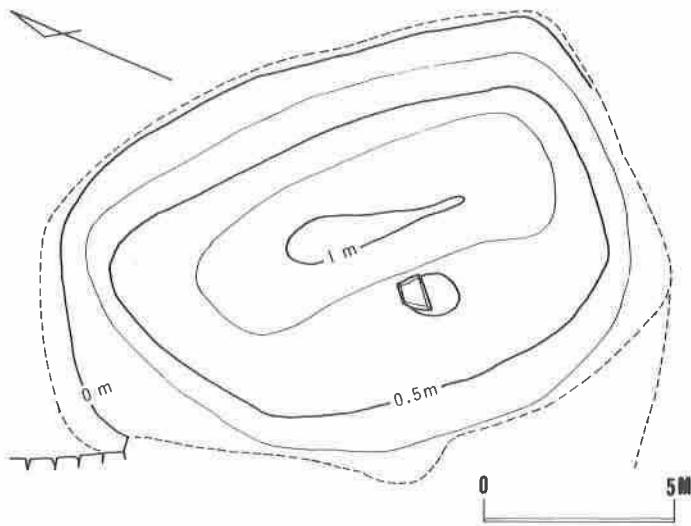
大字柏原に所在し、通称狐塚と呼ばれている。現在長径16m、短径11m、高さ1mの小丘を残し、その中央に被掘壙と石室石材を見る。明治40年頃に一度発掘され、石室の見取り図と出土品目が残っている。それによると、石室は、北西方向に開口する両裾式の横穴式石室で、玄室の長さ約4.2m、幅1.2m、羨道の幅約1.1m、長さは不明で、羨門部の一石のみ描かれている。奥壁は大型の鏡石一石を用い、玄室側壁は両側とも4石を配し、羨門石は両側とも縦位置に石材を置いて区別している。出土遺物は金環2、銀環1、刀子1、須恵器平瓶1、砲1、蓋杯1等がある。

須恵器類はおよそ7世紀初頭頃のものである。

（『改訂坂田郡志』第1巻（1975））

(8) 弾正塚古墳群（図11・12）

大字夫馬に所在する。横山の本丘陵と菅江集落の所在する谷部をはさんで、南北に細長くのびる支丘の基部付近、西側丘陵裾部に立地する。現在3基が確認されている。うち北端の一基は横穴式石室が露頭し、中央の一基は墳丘を残している。南端の一基は石室、墳丘とも不明であるが、古墳としてよいものである。北墳は墳丘の規模は不明であるが、南側に開口する横穴式石室を持っている。計測可能全長5.4m、玄室長4.2m、幅1.5m。羨道は立石を以って区別し、片裾である。すべて石灰岩の割石を使用し、奥壁は一枚石である。出土遺物は不明であるが、湖北地方の横穴式石室と比較する限り、6世紀末から7世紀初頭頃のものと思われる。中央墳は石室の形狀は不明であるが、墳丘を認めることができ、径15mを計る円墳であることが知れる。南墳は現状では墳丘、石室とも不明である。



壁石側石

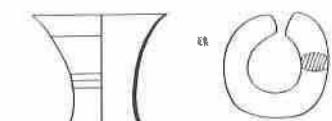
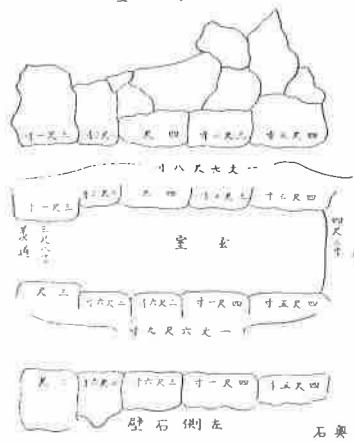


図10 王塚（狐塚）古墳墳丘測量図及び横穴式石室、出土遺物

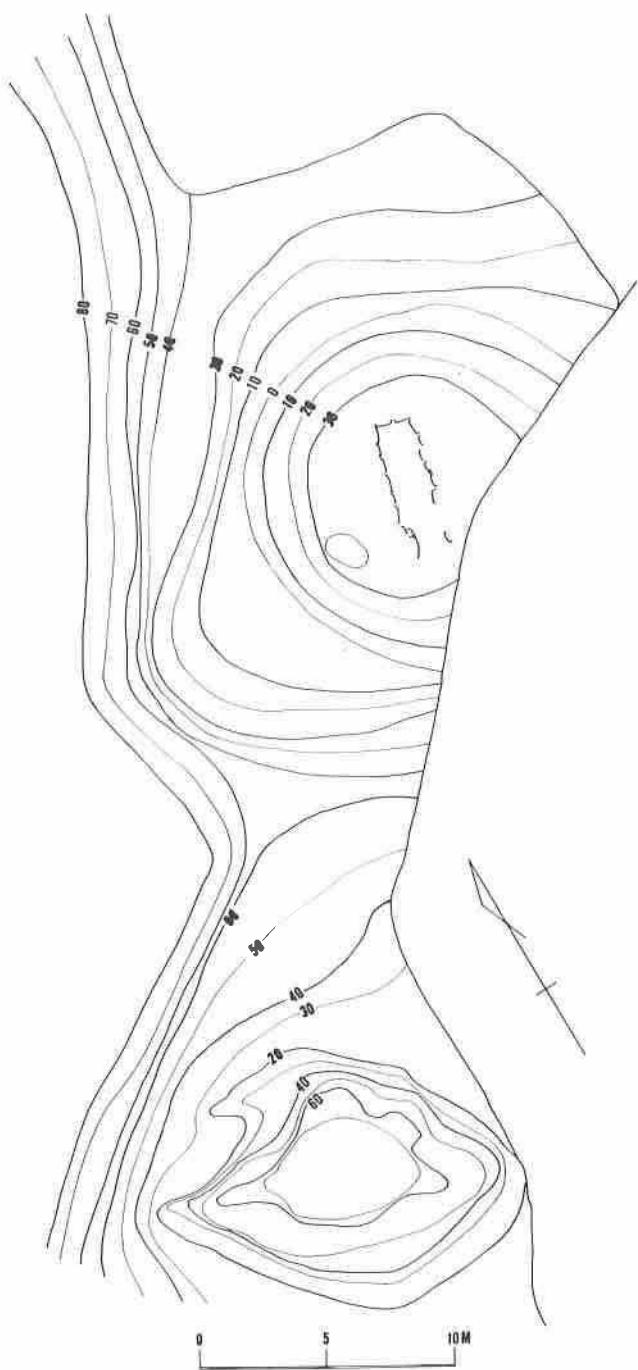


図11 弾正塚古墳群墳丘測量図

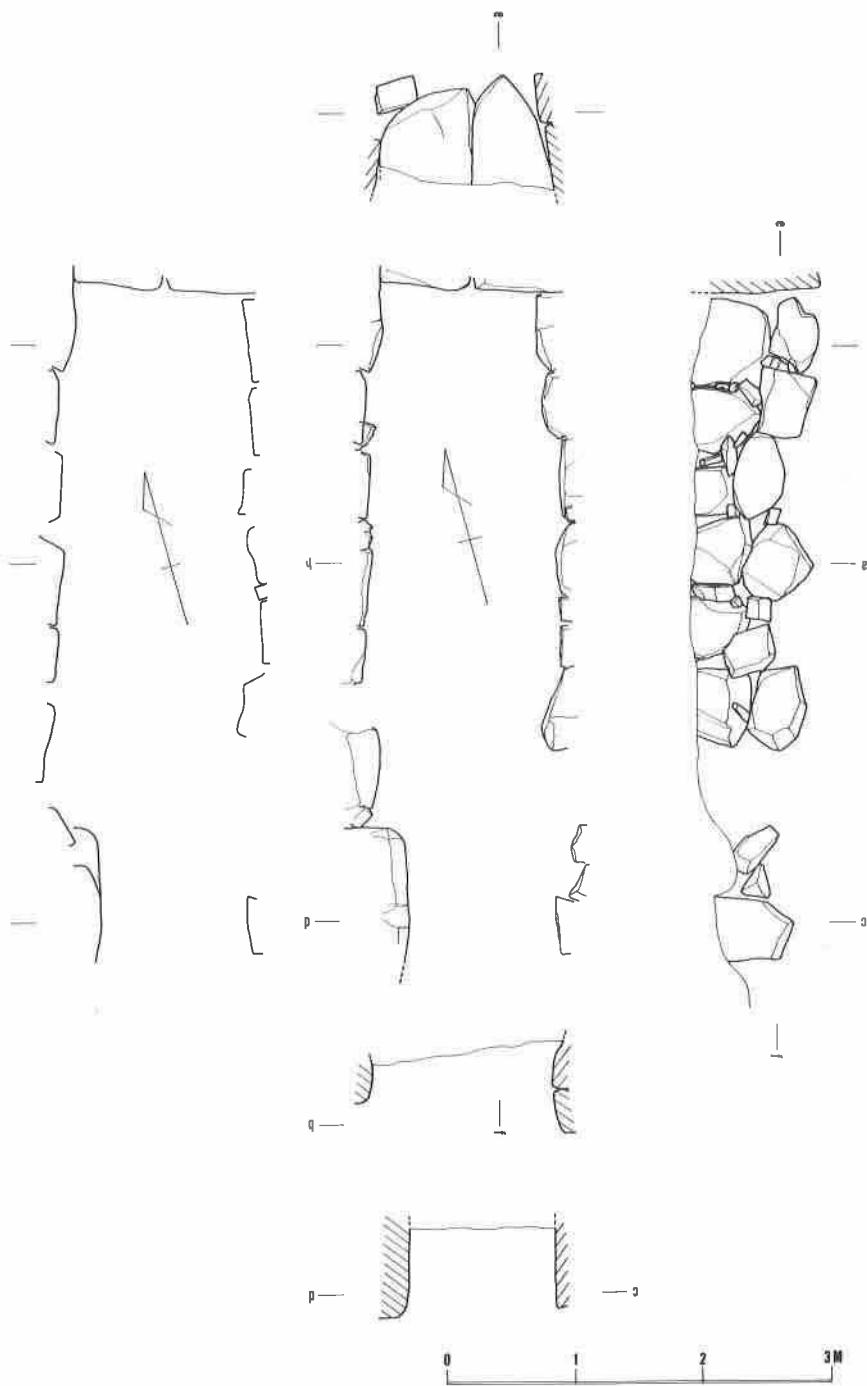


図12 弾正塚古墳群横穴式石室

(9) 菅江遺跡 (図13)

大字菅江に所在し、現在の菅江の集落と舌状丘陵をはさんだ南側谷奥部の丘陵斜面に立地している。窯体構造や基数、規模等は未調査のため不明であるが、土器類とともにスサ入り粘土塊が出土しており、窯跡であることは確実である。地元の方々が採集されたものを見ると、須恵器碗、蓋、甕、土師器の小片等が見られる。採集品から見る限り、須恵器の碗、蓋等の小品を中心に生産した窯跡と思われる奈良時代の須恵器窯である。

町内には、鳥脇、野一色、朝日等に数ヶ所で窯跡が確認されている。鳥脇の西谷窯跡、朝日の深尺谷窯跡等では須恵器類の破片が採集されている。詳細は不明だが、菅江遺跡も含めて、奈良時代における地方窯の中心地域の感を呈している。

(田中勝弘「山東町菅江窯跡出土の須恵器」(『滋賀文化財だより』No10、1978)

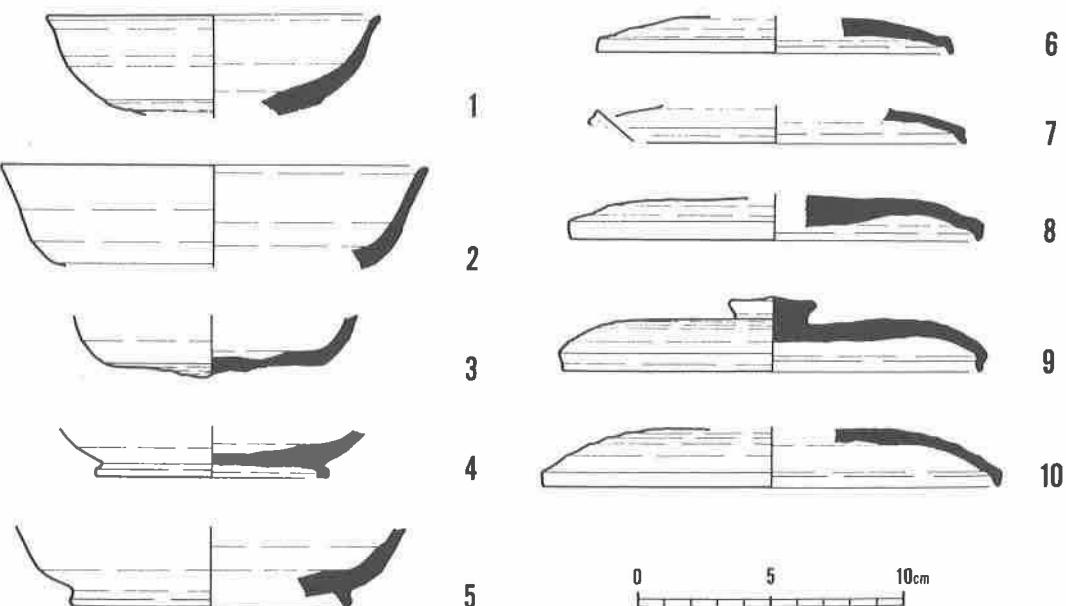


図13 菅江遺跡出土土器

(10) 北方田中遺跡 (図14)

大字北方に所在する。昭和59年度に滋賀県教育委員会により、県営ほ場整備事業に先立ち発掘調査が実施されている。この結果、17棟以上の掘立柱建物跡、門跡、溝状遺構、井

戸跡等多数の遺構が検出された。およそ8・9世紀と13世紀との遺構群である。掘立柱建物跡は、2間×3間、2間×4間、3間×3間、2間×2間の建物等がある。2間×2間で東柱を持つものは倉庫跡と考えられ、2間×3間で東柱1基を持つものは土間付の建物と思われる。また、2間×4間で桁行の中央の柱を欠くものも土間付と考えてよい。また、3間×3間の建物に三面に庇の付くものが見られる。門跡は四脚門である。これら建物群は、建物の方向によりいくつかの単位に区別できるが、大半が8・9世紀のものと考えられ、一部13世紀に下るものが含まれている可能性がある。溝跡は南北にのびるもので、8・9世紀の遺物が出土しており、建物群の東を限る溝になる可能性がある。井戸跡は13世紀のものとされている。

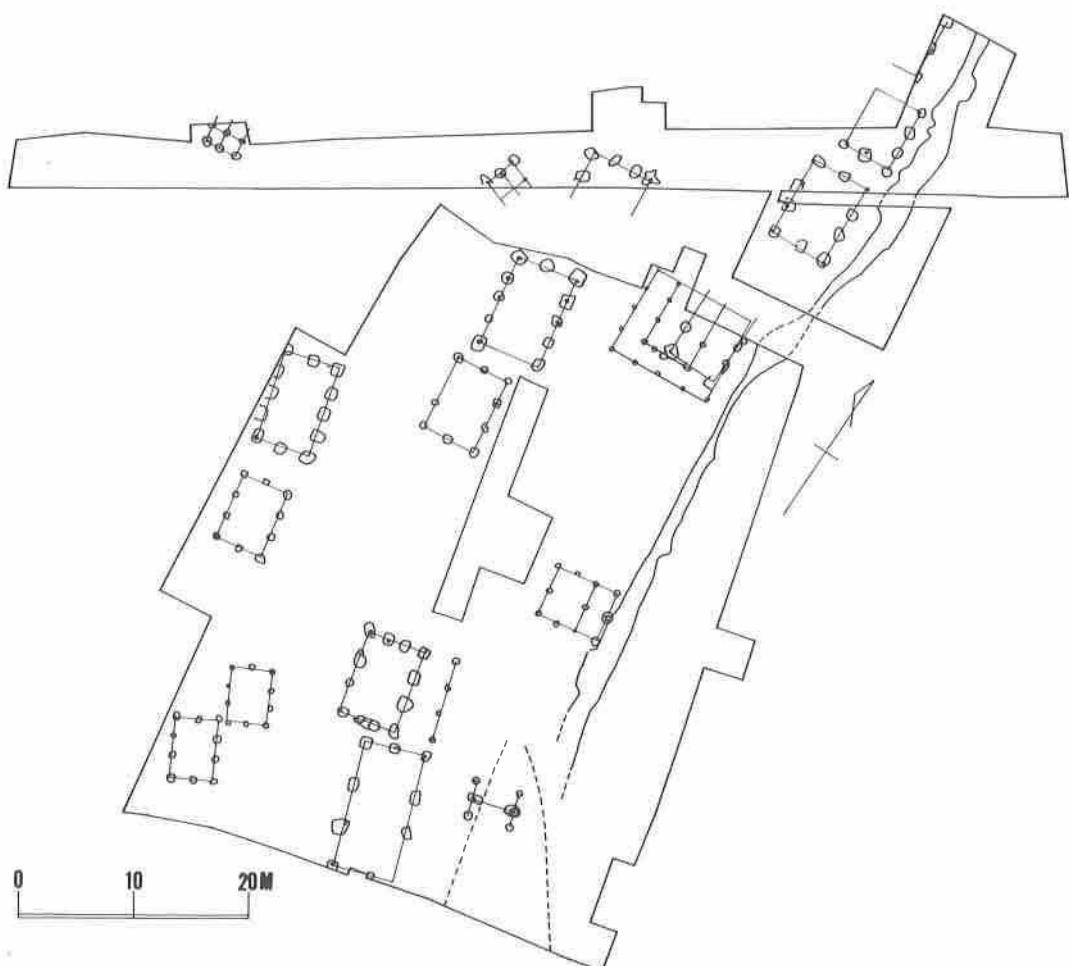


図14 北方田中遺跡遺構図

門を持ち、ある時期に三面庇を持つこれら建物群は、陶硯が出土していることも考えて、調査者は、郷長クラスの居宅ではないかと考えている。

(11) 清滝寺遺跡（図15・16・17）

大字清滝に所在する。徳源院のある谷部で、南と北に舌状に張り出す丘陵の先端を結ぶ現道を東限とし、これより谷奥部の250m×400mの範囲を想定している。丘陵端部を結ぶ現道と直交して谷部中央を通る道があり、その南北両側に、かつて坊跡があったと考えられる区画を見出すことができる。元禄13年（1709年）の清滝絵図に12坊が描かれ、その他にも坊跡と思われる区画ある土地が描かれている。現在は徳源院を残すのみであるが、かつてこの谷部に多数の坊、塔中があったものと考えられる。京極高光の菩提寺であった勝願寺はこの北東部に位置する。また、京極高詮の菩提寺とされる能仁寺は徳源院の南西部にある。狭い谷合いで、能仁寺谷と呼ばれ、建物跡と思われる平坦な区画が認められる。また、清滝神社北側谷部に、現在ほとんど朽ちはてた宝持坊があるが、この谷部には大門川をはさんで21に及ぶ平坦地が残り、坊跡の存在や一部庭園遺構の存在も推察されている。

清滝寺遺跡で唯一現存する徳源院は、京極氏信によって創建されたとされるが、その年

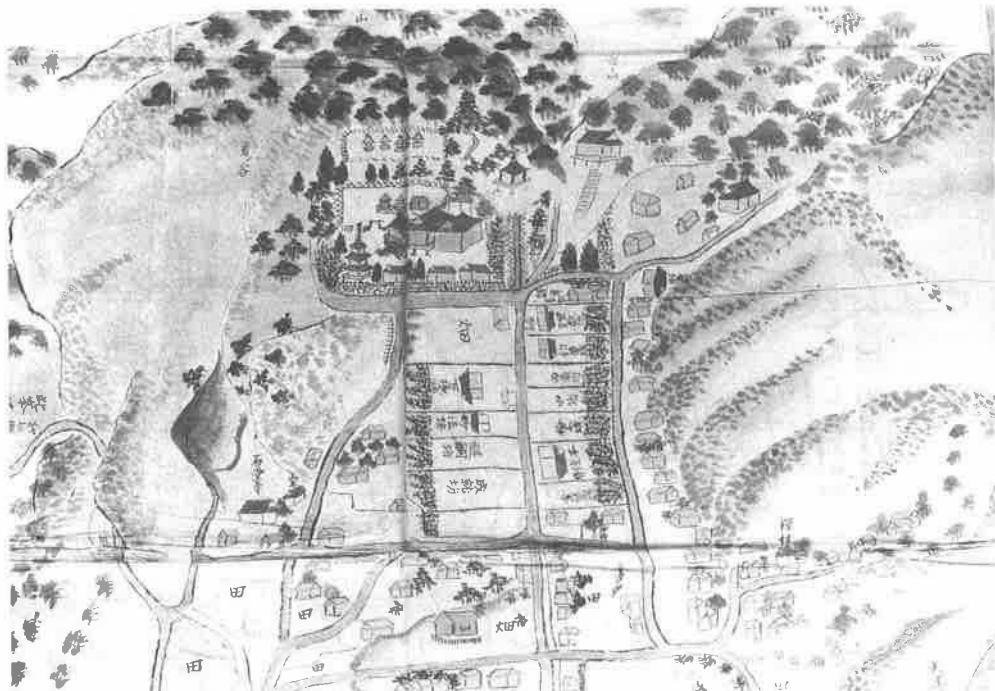


図15 清滝寺遺跡絵図

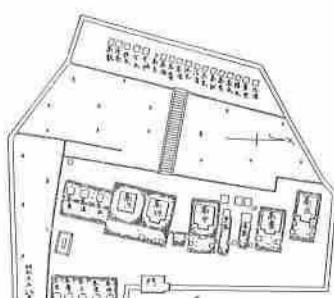
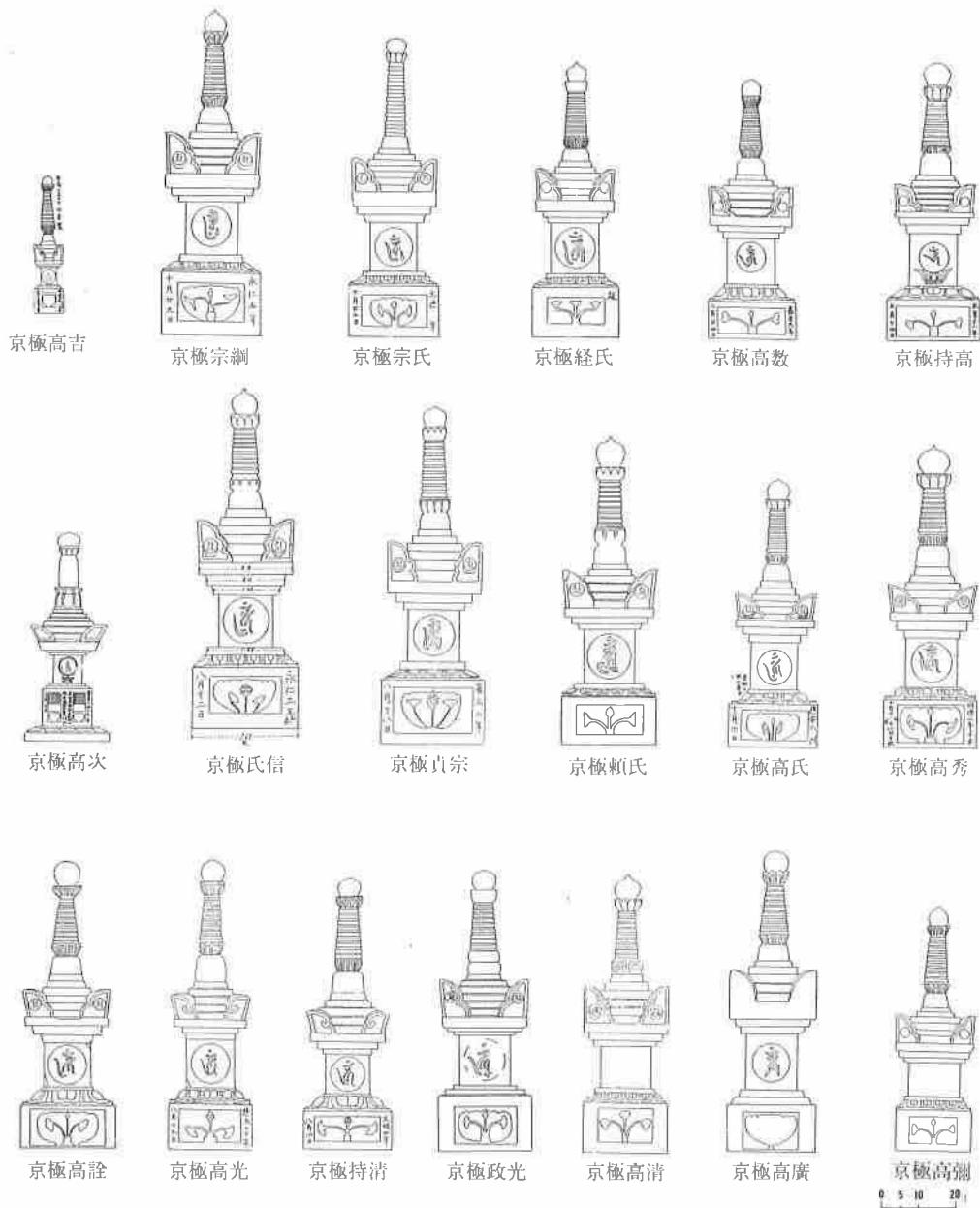


図16 宝持坊遺跡遺構図

代を確定することはむつかしい。同院蔵の古文書に弘安9年（1286年）の奥書のあるものがあり、この頃に存在していたことは確実である。氏信が没した時、その墓を清滝寺境内に営んだが、以後、京極家の墓所、菩提寺として栄えている。ただ、現在、徳源院に歴代の墓が置かれているが、現在のように上下二段の配列になり、整備されたのは寛文11年（1673年）のことである。それまでは、先述のように能仁寺や勝願寺等周辺の寺にまつられていたのである。徳源院京極家墓所の上段18基の宝筐印塔の中で、12基に銘文が認められるが、これらの銘文は必ずしも製作年代と一致しない。右より11番目の宝筐印塔はおそらく鎌倉中期頃のものではないかと考えられ、最も古式のものである。

清滝から柏原にかけては、幾つかの著名な宝筐印塔が見られる。清滝山中の北畠具行の墓、柏原の恵比須神社境内にある長寿塔、その北方の小字小野の現在の墓地の中にあるもの（小野西遺跡）等である。北畠具行は後醍醐天皇に仕え、鎌倉幕府討伐の元弘の変に加わり、失敗して捕えられ漸首されたが、幕府方の京極道誉がその忠心を思い、供養のために建てたものが現在の墓とされる。現在、80cm程盛土された墳墓状のもの上に、高さ6尺8寸（約2m）の宝筐印塔がある。台座部に貞和三年（1347年）丁亥十一月廿六日の銘文が刻まれているが、後世に刻まれたように見える。道誉の塔とされるものが徳源院の歴代墓所にあり、形式的には一致するが、京極家歴代墓所の宝筐印塔の年代が確定できず、従って、具行の塔も年代不確定とせざるを得ない。

長寿塔は恵比須神社の境内に立つ宝筐印塔と五輪塔である。両者組合を異にしている。



京極氏墓地



北畠具行墓



小野西遺跡



市場寺遺跡

図17 各地石造品

長寿塔は恵比須神社別当寺である市場寺にあったとされ、この附近がその故地ではないかともいわれる。この2塔は鎌倉後期から室町初期のものといわれているが、もう少し新しい形式を持っているように思われる。

(『改訂坂田郡志』(1975))

(奈良)

6. 遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代	立地	地目	備考
1	息長広姫陵古墳群	村居田	古墳群	古 墳	平 地	水 田	息長広姫陵及び付属地
2	堂の前遺跡	村居田	寺院跡	古 墓	平 地	宅 地	
3	板口遺跡	村居田	集落跡	平安以降	平 地	水 田	須恵器、陶器
4	村居田古墳	村居田字勘定之木	古 墳	古 墳	山 腹	山 林	円 墳
5	水尾遺跡	村居田			山 腹	山 林	
6	横山古墳群	村居田	古墳群	古 墓	山 頂	山 林	
7	大飼古墳群	村居田	古墳群	古 墓	山 頂	山 林	円墳、横穴式石室、長浜市
8	坂口遺跡	村居田	寺院跡		平 地	水 田	切石3枚、瓦
9	横山城跡	鳥 脇	城 跡		山 頂	山 林	井干(石組み)、長浜市
10	西谷遺跡	鳥 脇	窪 跡	平 安	山 腹	水 田	須恵器
11	猿田彦安命古墳	鳥 脇	古 墳	古 墓	山 腹	山 林	円墳(消滅)、木棺直葬、通称中塚
12	鳥脇A古墳	鳥 脇	古 墳	古 墓	山 頂	山 林	前方後円墳、通称上塚
13	すも塚古墳	鳥 脇	古 墳	古 墓	平 地	畑	横穴式石室(消滅)、馬具、鉄器、須恵器 『滋賀文化財だより』No10
14	鳥脇遺跡	鳥 脇	窪 跡	奈 良	平 地	畑	須恵器
15	西山古墳	鳥 脇	古 墳	古 墓	山 頂	山 林	
16	中の谷古墳	鳥 脇	古 墳	古 墓	山 頂	山 林	
17	禊音寺遺跡	朝 日	寺院跡		山 腹	寺 地	仁寿年間三修草創伝承
18	ちご塚古墳	朝 日	古 墓	古 墓	山 腹	山 林	円墳一基、横穴式石室
19	深沢谷遺跡	朝 日	窪 跡		山 篦	山 林	須恵器
20	朝日古墳	朝 日	古 墳	古 墓	山 頂	山 林	円墳一基
21	馬塚古墳	朝 日	古 墳	古 墓	山 頂	山 林	円墳、長浜市
22	井ノ口遺跡	井 ノ 口	寺院跡		平 地	墓 地	石 墳
23	皇后塚古墳	井 ノ 口	古 墳	古 墓	平 地	畑	横穴式石室、頂上に地蔵様
24	皇后塚東古墳	井 ノ 口	古 墳	古 墓	平 地	畑	横穴式石室
25	十津寺遺跡	小田字十津師	寺院跡		平 地	水 田	古文書
26	ぬか塚古墳	野 一 色	古 墓	古 墓	平 地	雜 林	円 墓
27	今中遺跡	野 一 色	窪 跡		平 地	畑	
28	正林坊遺跡	野 一 色	寺院跡		平 地	畑	正林坊と書いた墓石5点
29	間田発社古墳	間 田	古 墓	古 墓	丘 陵	山 林	円 墓
30	日御子社古墳	間 田	古 墓	古 墓	丘 陵	山 林	円 墓
31	唐子塚古墳	間 田	古 墓	古 墓	丘 陵	七 地	前方後円墳、葺石
32	番庄塚古塚	間 田	古 墓	古 墓	丘 陵	山 林	円 墓
33	高岡塚古墳	間 田	古 墓	古 墓	丘 陵	山 林	
34	岡古墳群	間 田	古墳群	古 墓	平 地	林 地	
35	京極城跡	本 市 場	城 跡		平 地	水 田	字名有り
36	十津寺遺跡	本 市 場	寺院跡		平 地	水 田	伝承地、瓦
37	田別塚古墳	天 满	古 墓	古 墓	平 地	水 田	円墳一基
38	寺屋敷遺跡	市 場	寺院跡		平 地	水 田	
39	双林寺遺跡	菅 江	寺院跡		山 腹	山 林	治承元年草創伝承
40	菅江遺跡	菅 江	窪 跡	奈 良	山 腹	山 林	須恵器 『滋賀文化財だより』No10
41	彈正塚古墳群	夫 馬	古墳群	古 墓	山 腹	山 林	円墳三基
42	上向川遺跡	夫 馬	集落跡	奈 良	平 地	水 田	須恵器、土師器
43	出口遺跡	夫 馬	散布地		平 地	水 田	須恵器、土師器
44	長禪寺遺跡	池 下	寺院跡		山 腹	寺 地	淳和天皇六年草創伝承
45	池下城跡	池 下	城 跡		山 篦	水 田	『滋賀県城郭分布調査』2.3
46	八王寺遺跡	西 山	寺院跡		平 地	畑	字名有り
47	次郎十遺跡	西 山	集落跡		平 地	水 田	須恵器
48	城山城跡	西 山	城 跡		山 頂	山 林	佐々木源氏居城
49	王街道塚古墳	西 山	古 墓	古 墓	平 地	水 田	円墳一基、須恵器
50	塚本古墳	北 方	古 墓	古 墓	平 地	水 田	円墳、横穴式石室
51	東良遺跡	北 方	集落跡	奈 良	平 地	水 田	

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代	立地	地目	備考
52	道照寺遺跡	北方	寺院跡	奈良以降	山腹	山林	字名有り、経塚
53	瓢箪山古墳	北方	古墳	青 墳	山頂	山林	前方後円墳?
54	北方田中遺跡	北方	集落跡	奈良末-令 鎌倉	平地	水田	建物跡、井戸、門跡、墨書き木札、土師器
55	小倉寺遺跡	山室	寺院跡		山腹	山林	山門、9坊跡有り字名有り
56	小倉山古墳	山室	古墳	古 墳	山麓	山林	円墳一基
57	しょうけ塚古墳	山室	古墳	古 墳	山麓	山林	円墳一基
58	宝安寺遺跡	山室	寺院跡		山麓	山林	神龜年間行基草創伝承
59	大鹿遺跡	山室	寺院跡		平地	水田	瓦・土師器
60	名越ごえの山城跡	山室	城跡		山頂	山林	『滋賀県城郭分布調査』2,3
61	西代遺跡	志賀谷	集落跡		平地	水田	須恵器、土師器
62	時重遺跡	志賀谷	集落跡		平地	水田	須恵器、土師器
63	馬塚古墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	円墳不明
64	南天塚古墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	円墳不明
65	柳原遺跡	志賀谷	経塚	古 墳	平地	水田	
66	引古 墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	円墳不明
67	松の木古墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	円墳不明
68	森塚古墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	円墳不明
69	石塚古墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	不明
70	七塚古墳	志賀谷	古墳	古 墳	平地	水田	不明
71	原毛古墳	長岡	古墳	古 墳	山腹	山林	須恵器
72	安能寺遺跡	長岡	寺院跡		山腹	寺地	
73	小林古墳	長岡	古墳	古 墳	山腹	山林	須恵器
74	東福寺遺跡	長岡	寺院跡		平地	宅地	石垣
75	琴岡山遺跡	長岡	集落跡	奈良-平安	山腹	山水田	須恵器、土師器 『滋賀文化財だより』No.10
76	満願寺遺跡	万願寺	寺院跡		平地	山林	京極高数の菩提寺石塔
77	極楽寺遺跡	堂谷	寺院跡		山腹	山林	天平宝字六年草創、瓦
78	堂谷西の砦遺跡	堂谷	砦跡		山頂	山林	『滋賀県城郭分布調査』2,3
79	堂谷東の砦遺跡	堂谷	砦跡		山頂	山林	『滋賀県城郭分布調査』2
80	法泉寺遺跡	本郷	寺院跡		平地	水田	須恵器、瓦、字名有り
81	深谷遺跡	大野木字深谷	集落跡	弥生	山麓	畑	石斧(谷田尾)
82	五反田遺跡	大野木	集落跡	弥生	平地	水田	石鏃
83	神宮寺遺跡	大野木	寺院跡		山腹	山林	元和年間草創伝承
84	御墓遺跡	大野木	集落跡	弥生-平安	平地	水田	石礫、土師器、『古墳地盤調査報告書』2-2
85	最勝寺遺跡	大野木字末信	寺院跡		山麓	山林	沙庵寺、末寺
86	伝潤寺遺跡	大野木字田中	寺院跡		山麓	山林	順慶寺、末寺
87	大野木遺跡	大野木字堂の前、西定此 葉師前	集落跡		平地	宅地	石棒
88	石丸遺跡	大野木	集落跡		平地	水田	石斧、須恵器、土師器
89	妙楽寺遺跡	大野木	寺院跡		山腹	山林	
90	青露遺跡	大野木	集落跡		平地	水田	須恵器、土師器
91	杉の木遺跡	大野木字杉の木、国定、川原	集落跡		平地	畑	須恵器
92	大野木館遺跡	大野木字弁財天	館跡		平地	水田	『滋賀県城郭分布調査』2,3
93	今屋遺跡	大野木字今屋	集落跡		山麓	宅地	土師器
94	五反海戸遺跡	大野木字五反海戸	集落跡		山丘端	宅地・畑	灰釉陶器、須恵器等
95	大峰(千畝敷)砦跡	大野木	砦跡		山腹	山林	『滋賀県城郭分布調査』2,3
96	北畠遺跡	須川字北畠、村之内	集落跡		山丘麓	宅地・畑	灰釉陶器、須恵器、土師器
97	須川城跡	須川	集落跡	弥生	平地	水田	『滋賀県城郭分布調査』2,3
98	須川館遺跡	須川字村之内	館跡		平地	宅地	
99	菅生寺遺跡	須川字大門	寺院跡		山丘端	社寺・畑	建久四年草創伝承

遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	種 類	時 代	立 地	地 目	備 考
100	須川山砦遺跡	須川字堂奥	砦 跡	古 墳	山 頂	山 林	『滋賀県城郭分布調査』2,3
101	駒平太塚古墳	須川字駒平太	古 墳	古 墳	山 腹	山 林	円墳、須恵器
102	勝願寺遺跡	清 滝	寺院跡		平 地	宅 地	京極高光菩提寺
103	宝持坊遺跡	清滝字本堂奥	寺院跡		山 腹	山 林	弘仁年門草創伝承 『滋賀文代財だより』No.92
104	清滝寺遺跡	清滝字大門、塔中	寺院跡		山 篓	寺 地	京極氏歴代墓菩提寺一部印史跡 『滋賀県報』5冊
105	能仁寺遺跡	清滝字奥の谷	寺院跡		山 腹	山 林	京極高詮菩提寺
106	小泉遺跡	清滝字小泉	集落跡		山 篓	水 田	須恵器、綠釉
107	殿村氏館跡	清 滝	館 跡		平 地	水 田	『滋賀県城郭分布調査』2
108	柏原城跡	清滝字大門、塔中	城 跡		山 篓	寺 屋	
109	北谷遺跡	清滝字北谷	寺院跡		平 地	林 地	
110	葉広遺跡	柏原字裏山	集落跡		平 地	水 田	須恵器、土師器
111	金比羅神社古墳群	柏原字山口、向山	古墳群	古 墳	山 腹	山 林	古墳三基？
112	談議所遺跡	柏原字小野	寺院跡		山 篓	寺 地	弘仁六年最澄草創伝承
113	向山遺跡	柏原字向山	墓 跡		山 篓	山 林	五輪塔
114	小野遺跡	柏原字小野	墓 跡	室	山 篓	墓	
115	市場寺遺跡	柏原字市場町	寺院跡		平 地	社 地	恵比須神社別当寺
116	柏原本陣遺跡	柏原字市場町	陣 跡		平 地	宅 地	
117	箕浦館遺跡	柏原字今川	館 跡		平 地	宅 地	『滋賀県城郭分布調査』1,2
118	柏原御殿跡	柏原字御茶屋	館 跡		平 地	宅 地	『滋賀県城郭分布調査』2,3
119	王塚古墳	柏原字狐塚	古 墳	古 墳	平 地	宅地・畑	円墳一基、横穴式石室、金環、銀環、刀子、須恵器
120	長塚古墳	柏 原	古 墳	古 墳	平 地	宅地・畑	円墳一基
121	妙法寺遺跡	柏 原	寺院跡		平 地	社 地	津島神社別当寺
122	北畠具行遺跡	柏原字丸山	墓 跡	南 北 朝	山 腹	山 林	国史跡
123	小黒谷遺跡	柏原字小黒谷	館 跡		山 腹	山 林	『滋賀県報』5冊
124	十善寺遺跡	柏原字長沢	寺院跡		山 腹	山 林・畑	
125	王子古墳	柏 原	古 墳	古 墳	山 腹	山 林	前方後円墳？ 町史跡
126	大山遺跡	柏原字大山	寺院跡		山 腹	山 林	
127	花房遺跡	柏原字明星、野添、花房	集落跡		平 地	水 田	須恵器、土師器
128	宝塔寺遺跡	柏原字花房	寺院跡		山 篓	山 林	
129	宝生寺遺跡	柏原字寺ヶ鼻	寺院跡		山 篓	山 林	
130	番匠塚内遺跡	柏 原	城 跡		平 地	水 田	
131	中塙内遺跡	柏 原	城 跡		平 地	水 田	
132	高屋遺跡	柏原字高屋	砦 跡		山 腹	山 林	
133	平林遺跡	柏原字平林	墓 跡		山 篓	山 林	弘仁六年最澄草創伝承
134	神宮寺遺跡	柏原字東町	寺院跡		平 地	社 地	中山道分間延経図、八幡神社別当寺
135	竜宝院遺跡	柏原字東町	寺院跡		平 地	宅 地	伊吹弥高百坊の1つ
136	白清水遺跡	柏原字白清水	集落跡		山 篓	水 田	須恵器片
137	野瀬山城跡	柏 原	城 跡		山 頂	山 林	『滋賀県城郭分布調査』2
	(長比砦)	長久寺字野瀬山					
138	長久寺遺跡	長久寺字大門、上野 境ヶ谷、狐ヶ洞	寺院跡		山 腹	山 林	灰釉陶器、須恵器、瓦
139	蘿山遺跡	梓河 内			山 篓	山 林	
140	西手遺跡	梓河 内			山 篓	山 林	
141	馬屋谷遺跡	梓河 内			山 腹	山 林	
142	黒谷遺跡	梓河内字黒谷	墓 跡		山 篓	山 林	石仏、五輪塔
143	番の面遺跡	梓河内字黒谷	集落跡	繩 文	山 腹	山 林	堅穴式住居跡 町史跡 『京都学芸大学報』No.9
		柏原字番の面					
144	石田館遺跡	梓河 内	砦 跡		山 篓	山 林	
145	河内城跡	梓河内字蛭谷、稗谷、 丸山	城 跡		平 地	宅 地	『滋賀県城郭分布調査』1,2
146	猪鼻城跡	梓河内字猪鼻	城 跡		山 頂	山 林	『滋賀県城郭分布調査』2
147	八講師城跡	梓河内字八講寺、椿谷	城 跡		山 頂	山 林	

7. おわりに

埋蔵文化財は、その性格上、地表面の観察だけでは、正確な範囲またその年代や性格等を確定することは極めて困難である。また、たとえ発掘調査により、遺構の分布範囲を決定し得ても、その当時の生活環境、自然環境をも含み込まなければ遺跡の性格を判断し得ない場合もある。こうした場合、遺構分布範囲のみを遺跡として把握することは妥当性を欠くであろう。本書は、時代の要請にもとづき作成されたもので、ある意味で目安としての役割でしかない。今後、学問の進歩により、遺跡として把握される範囲も変化するであろう。まして未発見、未確認の遺跡も多々あろうと思われる。こうしたことを考慮に入れ、本書は年々見直しを行っていかなければならない性格のものと言えるのである。

最後に、3年間にわたる分布調査には多くの方々の御助力をいただいている。末尾ながら、以下に列記して感謝の意を表わしたい。

立川正明、寿福滋（以上調査員）、塚越正之、溝口勝隆、国川三紀、武田知久、荻野勉、田辺宏明、西沢英治、夏原善治、西川良浩、田中恵二、中川浩一、大柳仁司、辻裕、羽口宗春、古沢寮治、日片さち、矢野憲治、安田正浩、長野忠義、鶴野浩司、細川みち子（以上調査補助員）、石田敏、長谷川銀三（以上図面提供者）、山田善市、広瀬竜麿、田中晋六、沢重朗、山中信而、日比野勇（以上山東町文化財専門委員）（敬称略）

昭和61年3月

坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書

編集・発行 坂田郡山東町教育委員会

坂田郡山東町長岡3127

TEL (07495) 5-2578

財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL (0775) 48-9780・48-9781

印刷・製本 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 351-6034

